2007.10.エッセイ（未発表）

雪原に降る星たち

雪の中の道はただ一本。積もりだした頃、誰かが一つ、一つ、足跡をつけていく。そんな積み重ねが１週間も続くと、細い雪道ができあがる。田舎の冬道を通る車などはなかったから、雪道はずっと細い一本道のままだった。中学生の僕は、放課後、そんな細い雪道を通って街のそろばん塾へ通っていた。

凍てつく晩は空気でわかる。決まってすかっと晴れて、夕暮れ空が美しい。しばらくすると東の山々に星が光り始める。そんな星を眺めながら塾へ行き、家へ戻るのだった。何日か晴れが続いたある晩、同じ星が東に見えることに気づいた。当時の僕には、星は夜空の飾りものに過ぎず、どの星がどこに見えようが意識の外だった。ところが、その時に限ってなぜか意識してしまったのだ。僕はその星に「東極星」と名前をつけることにした。「北極星があるんだから、東極星でもいいだろう」という安易な発想で、つまり、当時の私には北極も赤道もよく分っていなかったのだ。

僕の東極星は１週間もすると少し位置が変ったように見えた。何かの間違いかなと思ったが、さらに１週間もすると、間違いなくずれていることがわかった。あーあ、今、こうして思い返してみても恥ずかしい。地球が１日で自転していることや１年で太陽を巡っていることなど、教わっていたはずなのに、ちっともわかっていなかった。でも、こうして僕は星の日周運動や年周運動というものを「発見した」のだった。

冬の雪道は僕の天文台となった。夜空の照明灯に過ぎなかった月が明瞭な輪郭と表情を持った存在として迫ってきた。そして、月の見えない晩に僕はまた大きな発見をした。そう、夜空に数え切れないほどの星を「発見した」のだった。北極星も北斗七星も、そして僕の東極星もあった。オリオン座もあった。雪原に降る星たちは僕の心に鋭いイメージとして突き刺さるように映じた。

それから１年、狂ったように毎晩、毎晩、飽かずに星空と語らい、太陽や月を眺め、スケッチした。そして、丁度１年後、それがたたったのか、急性腎盂炎にかかり、１ヶ月の入院と安静を宣告された。塩分なし、脂肪分なしの味なし料理と安静には正直参った。以後、体力が戻らず、体育の時間はほとんど休みという情けない中学生、高校生生活となってしまった。それが響いて高校、大学と頑張りがきかず、勉強にも支障が出た。自然、星たちとの時間も減ってしまったが、心に深くしみ入った星のイメージは決して消えることがなかった。大学の卒業を目前にして、僕は不遜なことを考えた。「何とか星で生きることはできないだろうか？」当時、わが国で最初にプラネタリウムを導入した大阪市立電気科学館がプラネタリウム解説員を募集していた。「プラネタリウムで好きなことを話していれば良さそうだ」、躊躇する暇はなかった。昭和 49 年（1974 年）早春のことだった。33 年前のことである。

加藤　賢一